

大阪 OSAKA あそび歩 ASOBO

松虫の声りんりんりんとして夜の声冥々たり ～能「松虫」の舞台をめぐりながら～

① 松虫塚

松虫塚の由来については謡曲の題材となった話のほかにもいくつか伝説が残っている。後鳥羽上皇に仕えた松虫、鈴虫の二人の官女が法然の念仏に発心し、これを聞いて激怒した上皇によって法然が流罪になった後、都を追われた松虫がこの地に庵を結び隠棲したという。



② 熊野街道

熊野街道とは、熊野信仰が盛んであった頃熊野詣の往復に使われた大坂の八軒家と紀州の熊野三山を結んでいた道路のことで、その道筋は、八軒家から上町台地をたどって天王寺・住吉・堺を過ぎ、泉州を南下して紀州に入り海岸線に沿って熊野三山に達していた。

③ 安倍晴明神社

陰陽師として有名な天文博士・安倍晴明を祀る。安倍晴明の出生地と伝えられ、境内には安倍晴明像の他、誕生地の碑や安倍晴明公産湯井の跡などがある。付近には晴明の父・保名の名を冠した阿倍野保名郵便局がある。

④ 阿倍王子神社

仁徳天皇の創建とも、往古この地を本拠とした阿倍氏の創建ともいわれている。熊野詣が盛んな頃は熊野九十九王子社の阿倍野王子として賑った。府下唯一の現存する王子社でもある。

⑤ 伝北畠顕家(あきいえ)の墓

北畠顕家は後醍醐天皇に仕え、奥羽平定にあたった南北朝時代の公家・武将。延元3年(1338)、足利軍と阿倍野で戦い敗れた。『太平記』にはこの地で亡くなったとある。弱冠21歳であったという。墓碑は、江戸時代の学者並河誠所の提唱で、享保年間(1720年頃)に建てられた。

⑥ 播磨塚と小町塚

播磨塚は南北朝時代、播磨の武将赤松氏が、住吉の合戦で戦死した将兵の遺骨を納めて塚を築き、冥福を祈ったと伝えられている。小町塚は小野小町の塚であると伝えられるが不明。謡曲「卒都婆小町」に因んだものとも考えられる。

⑦ 岸の五本松

和歌に「岸の姫松」と歌われるように、この辺り一帯は古来より海岸沿いから続く松林が群生する地であった。海岸線が西に後退した後も、景観と防風のため、次々と松が植え足されていったが、戦後急速にその姿を消すことになる。岸の五本松はかつての岸の姫松の名残で、現在は4本が残る。

⑧ 阿部野神社

南朝方の各地を転戦した北畠顕家とその父・親房を祀る。阿倍野の地は顕家が足利軍と戦った古戦場にあたる。親房は後醍醐天皇の重臣。南朝の中心人物として京都奪還を図る傍ら、『神皇正統記』を著し南朝の正統性を訴えた。神社は明治15年(1882)に創立された。

◆ 能「松虫」

津の国阿倍野で酒を売る市人の下に、毎日のように友達と連れ立って来て、酒宴をして帰る男がいた。今日もその男たちがやって来たので、酒売りは訳を尋ねる。昔、この阿倍野の原を連れ立って歩いている二人の若者があり、その一人が松虫の音に魅せられて草むらの中に分け入ったまま帰って来ない。もう一人が探しに行くと草の上で死んでいた。死ぬ時はいっしょにと思っていた男は、泣く泣く友の死骸を土中に埋め、松虫の音に友を偲んでいるのだと男は話し、自分こそその亡霊であると明かして立ち去る。酒売りが回向をすると亡霊が現れ、回向を感謝し虫の音に興じて舞うが、暁とともに姿を消す。

◆ 能「巻絹」

都の男は、勅命により巻絹を奉納すべく熊野権現に向う途中、音無天神に参詣し和歌をむけるが期日に遅れた罪で縛られてしまう。天神は巫女に乗り移り和歌の徳を賞し、男を助ける。巫女は物狂いとなり、熊野の霊験を称えて神楽を舞う。

◆ 能「鉄輪」

夫に捨てられた女が貴船明神に丑の刻詣をし、生霊となって恨みを果たせるといふ神託を受け、鉄輪を頭にいただき夫のもとへ向かう。一方、夢見の悪い夫は陰陽師・安倍晴明に祈禱を頼み、呪詛を励ます鬼人の力と陰陽道の調伏修法の力の戦いが繰り広げられる。嫉妬、呪詛、復讐、妻まじい女の情念が描かれる。

◆ 能「卒都婆小町」

高野山の僧が供をつれて阿倍野の松原に来かかると、朽木に腰かけて休んでいる乞食の老婆がいた。見れば朽木と見えたは尊い卒都婆。僧たちがとがめると老婆は一步もひかず応酬。宗教問答となり老婆が勝利を収める。老婆は小野小町の成れの果てであった。突然、小町に深草少将の霊が憑き、彼女は狂乱状態になっていく。

◆ 能「高砂」

阿蘇宮の神主友成は旅の途中高砂の浦で、松の木陰を清める老夫婦に相生の松の謂れを尋ねた。老人は、播州高砂と津の国住の江の松は海を隔てながらも相生であると説き、夫婦和合と長寿を愛でた後、自分達こそ相生の松の精だと明かし姿を消すのだった。友成が住吉に着くと われ見てもくしくりぬ住吉の岸の姫松幾夜経ぬらん の歌に返して住吉明神が現れ、颯爽と舞を舞い千秋万歳を祝うのであった。

◆ 能「俊寛」

鬼界島に流されている僧都俊寛、少将成経、入道康頼は罪が同じであったにもかかわらず、俊寛のみは熊野への信仰心が足りなかったがため、もたらされた赦免状の中に一人名前がなかった。絶望の淵に嘆き悲しむ俊寛を残し、無情の赦免船は去って行く。極限状態に置かれた人間の孤独を描く傑作。

◆ 能「楠露」

楠木正成は、勅命により新田義貞のもとへ向かう。そのため、一子正行を桜井から故郷へ帰そうとする。父との別れを拒む正行とこれを説得する正成。宴がひらかれ、家人の恩地満一は舞を披露する。やがて父と子は涙ながらに訣別ののだった。